

# ひとひとのフォーラム足利2013 第2部



よく観ることは、よく生きること。

## 映画監督 講演 想田和弘さん

僕が実践する「観察映画」の方法論は、僕自身の生き方や経歴から生まれたものです。僕は足利高校から東大に進学し、宗教学を学びました。1993年に卒業後ニューヨークへ移住し、スクール・オブ・ビジネスアルーツの映画学科に入学。劇映画の製作を学びました。しかし卒業後は、たまたまスタッフを募集していたテレビ番組の製作会社に入り、ドキュメンタリー番組を作り始めます。

その作業はすごく刺激的で、数日間夢中で番組を作りました。しかし、やがてテレビ・ドキュメンタリーの予定調和な作り方(台本至上主義)や、説明過多なスタイル(わかりやすさ至上主義)に疑問を抱くようになり、もっと自由に自分なりのドキュメンタリー作りを追求してみたいと考え始めました。

そんな折、勤めていた会社の業績が悪化し、解雇されました。そこで、せっかくなら自分の好きなことをやるという気持ちになり、会社を立ち上げ、「観察映画」の製作を始めました。

僕の作品「選挙」(2007年)、「精神」(2008年)、「Peace」(2010年)、「演劇1」「演劇2」(2012年)、「選挙2」(2013年)は、すべて観察映画の方法論とスタイルで作られています。

### 観察

では、「観察映画」とはどんな映画でしょうか。僕の考える「観察」には二重の意味があります。一つ目は、作り手(僕)が先入観を捨て、よく観て、よく聴いて、その結果を映画にすることです。

二つ目は、観客に自分の目と耳でよく観て、よく聴いてもらうことです。

### 観察映画の10か条

そうした映画を実現するために、自分自身に10か条を課しました。①撮影前にリサーチしない、②被写体と打合せをしない、③台本は書かない、④カメラは原則一人で廻す、⑤カメラは長時間廻す、⑥狭く、深くを心がけて取材をする、⑦編集でも最初にテーマを設定しない、⑧ナレーション、説明テロップ、音楽を原則使わない、⑨カットは長めに編集し、余白を残す、⑩製作費は原則自分で出す。

### 観察映画の源流

とはいえ、それは僕が一から作り

上げた方法論ではありません。観察映画の源流は、アメリカで1960年代に勃興したダイレクトシネマです。それをお手本として、僕は21世紀に生きる自分の方法を模索しています。つまり「温故知新」です。

### 観察映画は

「主観」の産物ですが、それはなるべく先入観を排し、「発見」を重んじます。偶然巡り会った人々や出来事を記録し映画にしている。一期一会の方法論であるともいえます。台本も目的もない、一種の冒険旅行であります。また、人々の日常生活にカメラを向け、そこに潜むドラマをとりえる映画であるともいえます。そして、私たちの日常をみつめてみると、そこに社会全体の縮図が見えることも多いのです。

### 観察映画のねらい

観察映画は「当たり前」のように見えることも「当たり前」としないことから出発します。観察すると自分が変わります。よく観る、よく聴くことにより自分が成長します。今日みなさんも帰宅する時に、道行く人、お店、木々、大気などをよく観察してみてください。たぶん足利というまちが変わって見えるはずですよ。

(M・H)

## 映画『Peace』上映会

この映画は、ナレーション(説明)やテロップ(文字)、BGM(音楽)などは使用しない「観察映画」という方法で作られています。

2008年10月韓国の映画祭で想田監督の「精神」が最優秀ドキュメンタリー賞を受賞、その後依頼によって作られ、監督自身がカメラで撮影している作品です。

映画が始まると身近であるペットの猫が出て来る。脇役でしょうか、鳴き声がうるさく猫が強く頭にインプットされる。想田監督の意図なのでしょう。



『Peace』2010年の作品

映画は岡山県にある妻の実家(柏木家)義父・母が福祉関係の仕事をしている日常の生活を何気なく描写している。靴の購入を手伝ったり、病院への送迎や日頃の見守り、住ま

いの雑用などが映像化されています。登場者(橋本氏)の記憶として「競争体験」が入っている。一般に「赤紙と呼ばれている召集令状の葉書代が当時一銭五厘なので、男の値打ちはたったこれだけだ！」と戦争の話があった。そして、映画は老いと福祉の複雑なバランス問題へと入って行く。

画面は時折猫の話に戻る、餌時に猫がけんかをしている、新しい猫(映画では泥棒猫)が遠くから餌を食べているのを見てこっそり入って来る、元からいる猫たちは「ウー」と唸って仲間には入れてくれない、それでもそっと近づき食べて逃げて行く、こんな行動が続くので泥棒猫と名が付けられた。映画も後半になると先住の野良猫たちは知らん顔して受け入れ、黙々と自分の餌を食べている。先の猫だって足の不自由な猫もいて同じ様な運命だったよつです。

映画は猫を飼う最低限度の約束である、餌のやり方、食べ残し、糞尿の処理、雌猫の避妊処置、隣近所の敵しい目など、ペット問題も次々と続く。猫の生活パターンは4年程で何処かへ行ったり、新米猫の交代と

か義父の声を借りて画面に出ている。もちろん人の営みの方が映画としては多いのですが、猫情報もたくさんあります。Peaceの意味は「戦争と平和」ではなく「より良い平和へ」という所でしょうか、映画の中にその解決策が隠れています。映画からのメッセージは(監督から)見る者に伝わって来ます。映画は猫だけでも楽しめますが、気軽なバラエティではなく、見た人自身に考えさせる少し難しい幅の広い映画になっていました。

(M・K)

## フロアトーク

フロアトークは、講演会に参加の皆様からいただいた質問や疑問について、想田監督にお答えいただきます。実行委員の小林静子さんの司会が進められました。

小林●今後、どのようなテーマに興味がありますか？

想田●たくさんあり、パソコンの中に撮りたいリストが20以上あります。リサーチはしない主義なので、縁のあるところから。もちろん足利も。

小林●足利も候補に入っていて良かったです。また、原発については、

どうですか？

想田●「選挙2」は、東日本大震災直後に行われた川崎市議会選挙の様子を撮ったもので、ある意味「原発」についての映画です。東大時代の同級生「山さん」は、あれほどの原発事故が起きたのに、候補者たちが原発問題をタブー視して触れないことに疑問を抱き、無所属で立候補しました。その過程からは、日本人が原発事故にどう反応し、どう反応しなかったのかが見えてきます。是非、「選挙2」を見てほしい。

小林●ところで、マイケル・ムーア監督の作品は、予定調和でしょうか？

